

いろいろな形で盛んに開催するのがよい。そして選ばれた新人作家が、誇りをもって、意欲を燃やして参加していくように、内容を高めていくなど、補助金に代る予算の有効な使途がもっとあってよい。

それらに関連して第三には、例えばコンサート形式による美術展の開催や、分野にもとづく競い合いの場の設定も大事なこととなる。ただここで繰り返し注意しなくてはならないのは、計画の最初の根本の考えに、いつも創造意欲を高めるための、ということを念頭においておくということである。

少しでも良くあれ、と思う心からあえていえば、昨年開催の市民ギャラリー前の野外彫刻展は、恐らく、期間的にも予算的にも準備不足が目立った。さらに、もっと気になったのは、作家側に大いに責任があるが、室内彫刻がそのまま野外彫刻になり得るといふ、安易な考え方がみえたことである。作家や作品の選出方法、依頼方法、会場設置方法などに慎重な準備が必要ということになる。

この野外彫刻展など、地域の作家だけにこだわらず、例えば東京、あるいは関東地区からも参加させてもよいのではなからうか。とかく横浜は、近いゆえもあって東京文化圏のなかに入りこんでいるとよくいわれるが、それなら逆に、近い

が故に横浜に東京からひと寄せしやすいわけである。現在東京には、野外彫刻展はない。したがって、横浜で質の高い、理想的な野外彫刻展を開催したならば、東京からみなみになるだろう。定期的に開催するならば、日本の野外彫刻は、横

## 音楽

横浜市は市民の音楽を終局的にはどこへ持ってゆこうとするのか。私はやはり家庭に音楽を入れることが終局の目的であると思う。現在の日本の音楽はあらゆる部門で世界的な音楽家を出しているが、それは文化の尖端であって底辺の支えがない。西欧はまず底辺である家庭に音楽があつて、それをピラミッドとした尖端に一流音楽家たちがいる。横浜を始めたとする日本の地方都市は音楽文化の終局的結実を家庭に置くべきである。そこに立つてすべての音楽行政を考えるべきであると思う。五年ほど前まで県立青少年センターが、年一回だったが家庭的な音楽に賞を与える音楽会を催していた。

兄弟でピアノとヴァイオンの合奏をするとか、少年が自作のピアノ曲を独奏するとか、お母さんのピアノで息子が歌うとか、それらには下手でも賞を与えるような音楽会であつたが、ピアノや歌の教授

浜が中心ということになる。地域文化の充実向上にも役立つし、特徴ともなるはずである。

いずれの場合も、慎重な準備と専門スタッフの充実をはかっている立案、運営が望ましいことはいうまでもない。

横浜交響楽団指揮者 小船幸次郎

所の競争のようになったりして、この音楽会は中止されてしまった。ピアノのけいこを子供のアクセサリぐらいに考えている親たちが大部分の日本では極めて難しいことだが、それだけにやらなければならぬことだと思ふ。県の青少年センターが中止したこの家庭音楽会を市の社会教育課あたりが再建したらどうだろうか。

### 県市で四つの自主事業

横浜市のような地方都市が音楽文化を振興しようとする、いつも二つの方法が採られる。その一つは中央都市東京から有名な音楽家や音楽団体を招くこと、他の一つは地元で音楽家や音楽団体を育成することである。

中央から音楽家や音楽団体を招くことは、県と市によってかなり行われている。まず県立音楽堂が毎年四百五十万円

程度の補助金を音楽マネージャーに与えて、年間五回から六回来朝する有名な外人音楽家、音楽団体による音楽会を音楽堂で開催している。これの大きな特徴は事前に専門家の意見を聴き、その意見に従って演奏家を決めていくことである。

この事業はもう二十年続いている。最近県が建てた県民ホールは当初自主事業ではないという事だったが、文化庁提供の二期会オペラを招いたりしている。市は社会教育課が東京の交響楽団や室内楽団、さらに個人の演奏家を年一回または二回招いているが、これももう十年近く続いているのではない。教育文化センターが建てられてここでも自主事業の一つとして年間二回または三回、中央から音楽家または音楽団体を招いて同センターのホールで音楽会を開催している。横浜は少くとも以上の四つの自主事業によって、市民の音楽文化向上を目的とした音楽会が開かれている。横浜市民は恵まれているといつてよいのではないか。

### 事前に専門家の意見を

問題があるとすれば、県立音楽堂を除いては、自主事業が職員の考えだけで行われているということである。公共団体が市民に音楽を与えようとする場合、大きくは日本人の音楽に対する感応の仕方、日本の音楽はどうあるべきか、小さ

くは横浜の音楽はどうすべきか、どうい  
う種類の音楽を誰によって演奏されるべ  
きかなどを考えることのできる専門家の  
意見を事前に聴くべきである。

先日教育文化センターの事業部から今  
年中に開催したい音楽会に対して意見を  
求められた。音楽会は既に音楽の種類か  
ら傾向、演奏者まで予定してあった。何  
も相談しない従来のやり方から見れば大  
進歩であるが、相談は何もきめない前に  
すべきだというのが私の意見である。と  
はいうものの、事業部がきめていた今年  
度の音楽会の傾向には感心した。事業部  
が開催しようとしている音楽会にはベ  
ー・トゥー・ヴェンもモーツァルトもショパンも  
シューベルトもいなくて、テレマン、バ  
ッハなどのバロック音楽と、現代日本の  
作品が並んでいた。一見無謀に見えるこ  
の企画には一本筋が通っている。

日本の音楽は十九世紀後半に始まった  
ので、その最初がベーター・ヴェンやシュ  
ーベルトの音楽であった。音楽としては  
いわゆるローマン派の音楽である。日本  
の音楽はここから始まったので、音楽の  
基本が一般には見失われがちである。音  
楽は少くともテレマンやヴィヴァルディ  
らが活動した十七世紀の音楽から始まら  
なくてはならない。幸にして現代のヨー  
ロッパで十七世紀バロック音楽の演奏が  
盛んになったので、日本が音楽の基礎を

聴き直す機会に恵まれた。教育文化セン  
ターの事業部が横浜市民にも音楽をここ  
から聴き直させようとするその企画には  
筋が通っている。

音楽も芸術である以上、創作(作曲)  
によって実を結ぶものだ。現代の日本に  
おける音楽文化の実りを市民の耳に届け  
るには、現代日本の作品を演奏するに越  
したことはない。この点でも教育文化セ  
ンター事業部の企画は筋が通っている。

自分の演奏会場を持っていない市の社  
会教育課は、教育文化センターより自主  
音楽会の企画は立てにくいと思うが、企  
画を立てる前に専門家に聴く必要がある  
と思う。

### 少ない専門家の活動

さて地元横浜の音楽はといえば、他の  
文化同様音楽もまた専門家の活動が少な  
い。あっても地元の文化に即した活動が  
ない。保土ヶ谷に住む二期会の吉岡巖氏  
が横浜在住の歌手を集めてカントローレ  
という団体を作ってオペラ運動をしている  
のと、チェロの村瀬忠義君とヴィオラの  
村瀬隆雄君の兄弟が毎月主催している室  
内楽演奏会の二つが目立った活動であ  
る。これらはそれぞれ専門家が参加して  
いるが、それによって生活はしていない  
から、その点からは横浜市民に対する一  
つの文化奉仕である。市民に対する文化

奉仕は主としてアマチュアである。

アマチュアが参加しやすく、専門家の  
参加がむしろ少い音楽分野は、合唱であ  
る。合唱はいつの時代も、どこの地域で  
も盛んであった音楽である。合唱は時代  
に応じたその音楽形態や音楽内容を変え  
てゆく柔軟性を持っている。

現在は女声合唱が最も盛んで、殊に若  
い主婦たちによる合唱団は横浜だけで五  
十団体は下るまい。これらの団体が歌う  
曲は日本人の手によるオリジナル作品  
で、それらは日本の特性と傑れた技術で  
書かれている立派な作品が多い。

横浜における混声合唱団の名門であつ  
たオラトリオ協会、木曜会、紅葉ヶ丘な  
どは昔の面影はないが、その中で吉田孝  
古磨君が指導している横浜混声は、吉田  
君の合唱に対する稀に見る才能を合唱団  
を通じて発揮させているので、合唱音楽  
の盛衰とは関係なく、横浜にはなくては  
ならぬ演奏会として貴重な演奏回数を重  
ね、多くのファンに支持されている。

横響はこの三月の演奏会が三百三十六  
回目の定期演奏会になる交響楽団のしに  
せである。この演奏会回数はNHK交響  
楽団に次ぐ回数である。横響はアマチュ  
アであるが、毎月定期演奏会を開いてい  
る。NHK以外のプロ交響楽団の定期演  
奏会というのも毎月一回であるから、こ  
のままゆけば横響の回数を上回ることは

できない。横響は、プロ交響楽団を持ち  
得ない横浜のためにプロ交響楽団の代理  
を務めるつもりで、毎月演奏会を行って  
いる。毎月演奏会を行っているアマチュ  
ア交響楽団というのは世界中で横響だけ  
のようだ。私は日本で最も西洋風だった  
横浜に生れ、横浜にだけあつた外人家庭  
の音楽、合奏、オーケストラを見て、こ  
のような横浜の文化を残そうとした。そ  
れが横響の始まりである。横浜に横響に  
代るプロ交響楽団が生れたらいつでも横  
響は引下ろうと言いながら、もう二十年  
たってしまった。東京に近いために高い  
文化の育ちにくい現在の横浜は、まだ当  
分横響を必要とするだろう。

### 援助して仕事は自由に

以上大ざっぱではあるが、横浜におけ  
る音楽の動向を述べてきた。今の横浜で  
はプロといえどもアマチュアと同じ奉仕  
を強いられるのであるが、そうした状態  
の中でも何かやらねばと考えるのが、音  
楽につかれた者の心である。地元横浜の  
音楽文化に貢献していると思われる以上  
の団体のうち、市の援助を直接受けてい  
るのは横響だけではないか。援助にもい  
ろいろな方法があるとは思いますが、これ  
と思う団体に出すものを出して仕事は自  
由にやらせるといふのが、最もよい援助  
のように思う。もう一つの方法は、自由

に使える練習所を与えてやることである。これをもう一步進めて、幾つもの練習室と演奏会場を備えた「横浜音楽セン

## 演劇

### 横浜市民と職業演劇

日本の職業演劇は、ほとんどが東京に集中し、他地区でこれを鑑賞するために、劇団がその地へ来て、自主的に興行するのを待つか、鑑賞組織を作ってこれを招ぶことになる。横浜でもそれは例外ではない。

横浜の鑑賞組織は、横浜演劇研究所が主催する「横浜フォルクスビュート」(横浜市民劇場)が昭和三十一年一月に、劇団仲間によるヴァイゼンボルン作「三人の紳士」を、県立音楽室で上演した時にはじまる。大阪に次いで東京と共に全国で最も長い歴史を持つ鑑賞組織の一つとなっており、今年の十月には、第二百零目の例会を持つ。

この他に、昭和四十八年七月に京浜労演から分離独立した「横浜労演(現在の名称は横浜演劇鑑賞協会)」があり、同じく市民に演劇鑑賞の機会を提供している。市民が良い演劇に触れる機会を少しでも多く、という主旨から、横浜市民も昭

ター」を建てれば、横浜の音楽運動は大きく発展する。

### 横浜演劇研究所常務理事 飯田克衛

和四十五年度以来、年二回ずつ(昨年からは年一回二ステージ)東京から新劇を招んで「演劇鑑賞会」を無料で開催している。その他には、市民が横浜で職業演劇に接する機会にはなはだ少ない。

前記二つの鑑賞組織についても、これは全国的な傾向でもあるのだが、会員数の伸び悩み、或は不安定が目立っている。市の人口からいっても、きわめて一部の人たちだけが、日常的に(と云っても年に十乃至十二回位)職業演劇を享受しているに過ぎないのが現状である。東京に近いため、観たい時にはいつでも東京で観られるという安心感(実際には観に行く事は稀なのだが)、或は数少ない例会日と自分のスケジュールが合いくい、更には会員になると、いう拘束を嫌う、といったことが、鑑賞組織が不安定な状況にあることの要因ではある。身近な場所、いつでも観たい時に、できる限り安い料金で、優れた作品を観ることができるようになれば、より多くの市民が演劇鑑賞に参加することになる

う。そのためには「市立劇場」をつくらなければならない。この場合の劇場とは、建物だけの意味ではなく、スタッフ、キャストを揃え、常に優れた演劇を創造し、市民に日常的に提供している所ということだ、西欧の都市には必ず存在する公立劇場がそうであるように。

### 市民による演劇とその状況

今、横浜で演劇を日常的に市民に提供しているのは、アマチュア演劇である。

市内には現在一五ほどのアマチュア劇団があるが、その中の一二劇団によって組織されている「横浜アマチュア演劇連盟」は、独特の「横浜方式」による演劇活動を展開している。

昨年創立三十周年を迎えた葡萄座をはじめ、二十年以上の歴史を持つ麦の会、かに座、横浜小劇場(横浜演劇研究所付属劇団)、そして十八年を経た創芸等、横浜で夫々のやり方で活動していた市内の一二の劇団が、昭和四十二年七月「横浜アマチュア演劇連盟」を結成した。それまでも、折にふれて協同の仕事をしてはいたが、四十二年四月から、麦の会と横浜小劇場によって、神奈川県電業会館ではじめられた「土曜小劇場」の成功が一つのきっかけになって、連盟は発足した。

折しも、横浜駅東口に開場したスカイ

劇場の、アマチュア演劇の利用に対する市当局と劇場側の好意的配慮から、同劇場が連盟加盟劇団の常打ち小屋として利用できるようになったことが、その公演活動に大きな力となり、毎月第三土・日(若干ずれる月もある)に市民劇団の上演が定期的に行われることになった。

神奈川県電業協会のご好意により、同協会会館ホールの低料金による春秋二シーズンの毎土曜の使用が可能となったこととあいまって、横浜では、毎月第三土・日と、春秋二シーズンの毎土曜には、スカイ劇場及び電業会館に行けば必ず演劇をみることができるといふ態勢が確立された。このことが市民に浸透するにつれ、従来劇団関係者が殆どであった観客の中に、いわゆるフリーの観客が増えはじめ、今では毎回観客の三十%前後が当日売の一般市民によって占められるようになってきている。

### 市民演劇の問題点

しかし、全国各地に比較すれば恵まれた状況を確立した現在でも、悩みはまだ多い。個々の劇団の問題点を集約すると、横浜のアマチュア演劇の今後の課題が引出されてくる。その主なものを列記すると次のようになる。

#### ①劇団員が定着し難いこと

アマチュア演劇の当然の姿勢ではある